マルクス/エンゲルス選集

MARX ENGELS

Ausgewählte Werke

3

大月書店

マルクス＝エンゲルス選集

ソ同盟共産党中央委員会付属 編
M・E・L・S研究所
M・L主義研究所 訳

第三冊

大月書店

マルクス＝エンゲルス選集　第3冊　　¥ 160.

昭和30年8月10日　第1刷発行

検印いたしません

訳者　マルクス＝レーニン主義研究所
発行者　小林直衛
印刷者　山田博

発行所　大月書店
東京都文京区本郷1の15
電話(92)3091・7887
振替東京　16387

三陽社印刷・田中製本

目　次　第三冊

ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日（マルクス）……一
第二版へのマルクスの序文……二
第三版へのエンゲルスの序文……五
ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日……九
インドにおけるイギリスの支配（マルクス）……一七一
イギリスのインド支配の将来の結果（マルクス）……一八三
『ピープルズ・ペーパー』創立記念日の演説（マルクス）……一九五
『経済学批判』序文（マルクス）……二〇一
カール・マルクス『経済学批判』書評（エンゲルス）……二一一

国際労働者協会創立宣言（マルクス）……二三九
国際労働者協会一般規約　前文（マルクス）……二四五
プルードン論　J・B・シュワイツァーへの手紙（マルクス）……二五三
解　説……二六八
人名注
事項注

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日

カール・マルクス

第二版へのマルクスの序文

あまりにも早死した私の友人ヨゼフ・ワイデマイヤーは*ニューヨークで一八五二年一月一日から週刊の政治新聞をだそうとくわだてた。彼は私に、この新聞にあのクーデターの歴史を寄稿するようにもとめた。そこで私は、二月なかばまで毎週、『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』[1]という題で論文を彼に書きおくった。そのあいだに、ワイデマイヤーのはじめの計画はだめになった。そのかわりに彼は、一八五二年春に『レヴォルツィオン』という月刊雑誌を発行したが、その第一号は私の『ブリュメール一八日』からなっていた。そのころ同号の二、三百部がドイツにとどいたが、ふつうの本屋にはでなかった。私は、ひどく急進ぶっていたドイツのある本屋にそれを売るようにすすめてみたが、その本屋は、こういう「時世にあわない要求」にたいして、真に道徳的な恐れをもってこたえてきた。

* アメリカの内戦〔南北戦争〕のとき、セント・ルイス地区の軍司令官であった。

右にのべたいろいろの事実からわかるように、この本は事件の直接の印象のもとにできたもので、その史料は（一八五二年）二月以後にはおよんでいない。いまこの著作をもう一度公けにするのは、一つは書店の求めによるものであり、また一つにはドイツにいる私の友人たちの

たっての勧めによるものである。

私の本とほぼおなじころにでて、これとおなじ対象をあつかった本のうちで、注目にあたいするものは二つしかない。ヴィクトル・ユーゴーの『小ナポレオン』とプルードンの『クーデター』とがそれである。

ヴィクトル・ユーゴーは、このクーデターの責任発行人にむかって、しんらつな、気のきいた悪口をあびせかけるだけにとどまっている。ユーゴーにあっては、この事件そのものがまるで青天のへきれきのようにしておこっている。彼はこの事件を一個人の暴行としかみていない。この個人が世界史上に例のないような個人的な主動力をもっていたとすることで、その人物を小さくせずに、かえって大きくしているのだということには、彼は気がつかない。プルードンのほうは、クーデターを、それにさきだつ歴史的発展の結果として説明しようとしている。ところが、プルードンにあっては、クーデターを歴史的に構成していくことが、知らず知らずクーデターの主人公の歴史的弁護論にかわってしまう。こうして彼は、世にいう客観的編史家のおかす誤りにおちいっている。これに反して私は、ある凡庸で、こっけいな一人物に英雄の役割を演ずることができるようにした事情や情勢が、どのようにしてフランスの階級闘争によってつくりだされていったかを、しめすのである。

この本を書きあらためれば、その独特の色合をとりさることになるだろう。だから私は、た

だ誤植をただし、またいまではもうつうじなくなった暗示をけずるだけにした。

私の本の結びの文章「しかし、皇帝マントがついにルイ・ボナパルトの肩にかかるときには、ナポレオンの銅像はヴァンドームの円柱のてっぺんからころげおちるだろう」という言葉は、すでに実現された。[2]

シャラー大佐が、一八一五年の戦役[3]についての著書で、ナポレオン崇拝にたいする攻撃の火蓋をきった。それ以来、ことにこの数年のあいだにフランスの文献は、歴史研究や、批評や、諷刺や、しゃれを武器として、ナポレオン伝説にとどめをさした。伝統的な民衆信仰とこのようにはげしく縁をきったこと、この巨大な精神革命は、フランス以外ではほとんど注意をはらわれず、まして理解もされなかった。

最後に、私の本が、いまとくにドイツにはやっている、いわゆるカエサル主義[4]という学校文句をかたづけるのに役だつとよいと思う。こういうわすべりの歴史上の類推をやりながら、人々はかんじんなことをわすれてしまうのである。それは、古代ローマでは、階級闘争はただ特権的な少数者のなかで、つまり、自由民の金持と自由民の貧乏人とのあいだでおこなわれたのであって、他方、住民の大多数をなす生産者、つまり奴隷は、それらの闘争する人々のための受動的な踏台にすぎなかった、ということである。ローマのプロレタリアートは社会の費用でいきていたが、近代社会はプロレタリアートの費用でいきている、というシスモンディの意

味ふかい評言を、彼らはわすれているのである。古代と近代との階級闘争の物質的・経済的条件はまったくちがっているので、その階級闘争のうみおとす政治的人物のあいだにも共通なものなどがあるはずはないのは、ちょうどカンタベリー大司教と〔古代イスラエルの〕祭司長サムエル[5]とのあいだにも共通なものがないのとおなじである。

ロンドン　一八六九年六月二三日

カール・マルクス

一八六九年ハンブルグ発行の自著『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』の第二版のためにマルクス執筆
第二版のテキストによる

第三版へのエンゲルスの序文

初版がでてから三三年もたって『ブリュメール一八日』のあたらしい版が必要になったことは、この小さな本がいまでもまだその価値をすこしもうしなっていない証拠である。

またじっさい、これは天才的な著作であった。青天のへきれきのように政治界全体の不意を打った事件、あるものは道徳的な憤激の声たかい叫びをあげて断罪し、またあるものは革命からのすくい、革命の混乱にたいする罰とうけとったが、しかしみな唖然として見ているばかり

で、だれ一人理解するものもなかった事件――その事件のすぐあとでマルクスは、みじかい、寸鉄人をさすような叙述を発表した。それは、〔一八四八年〕二月事件[6]以来のフランスの歴史の全経過をその内的連関をしめしながら叙述し、〔一八五一年〕一二月二日の奇蹟はこのような連関の自然の、必然的な結果でしかないことをあきらかにしたもので、そのさいこのクーデターの主人公を、それに相応した軽蔑以外の仕方であつかう必要さえもなかったのである。しかもこの絵は、ひじょうな巨匠の手ぎわでえがかれていたので、そのごいろいろの事実があたらしくわかってきても、それらはみな、この絵がどんなに忠実に現実を反映しているかということのあたらしい証明となっただけであった。いきた日々の歴史をこのようにみごとに理解し、事件がおこっているその瞬間にそれをこのようにはっきりと見ぬくということは、じっさい類例のないことである。

しかし、そうするためにはまたマルクスくらいフランスの歴史を正確に知っていることが必要であった。フランスは、歴史上の階級闘争がほかのどの国にもましていつも結着までたたかいぬかれた国であり、したがってまた、階級闘争がそのうちですすめられ、階級闘争の結果がそれにしめくくられてゆく、つぎつぎにかわる政治形態が、もっともくっきりとした輪郭をとっている国である。中世には封建制度の中心であり、ルネッサンス以来は統一的な身分的君主制の模範国であったフランスは、大革命ではヨーロッパのほかのどの国にも見られないほど典

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

型的な形で封建制度を粉砕し、ブルジョアジーの純粋の支配をうちたてた。そして、支配しているブルジョアジーにたいする、拾頭してくるプロレタリアートの闘争も、フランスではほかでは見られないするどい形をとってあらわれている。こういう理由でマルクスは、フランスの過去の歴史をとくにこのんで研究したばかりか、その今日の歴史をもきわめて詳細にあとづけ、将来つかうために材料をあつめたのであって、その結果いろいろなできごとに不意打ちをくうことがけっしてなかったのである。

しかし、これにくわえてもう一つの事情がある。歴史の運動の大法則をはじめて発見したのは、まさにマルクスであった。この法則によれば、すべて歴史上の闘争は、たとえ政治や、宗教や、哲学や、その他のイデオロギーの分野でおこなわれても、じっさいには社会諸階級の闘争を多かれすくなかれ明白に表現したものにすぎないし、これらの階級の存在と、したがってまたそれらのあいだの衝突とは、それ自体、それらの階級の経済状態の発達程度によって、それらの階級の生産とこの生産に条件づけられる交換との仕方によって、条件づけられる、というのである。この法則が歴史にたいしてもつ意義は、エネルギー転換の法則が自然科学にたいしてもつ意義にひとしいのであるが、ここでもこの法則がマルクスにフランスの第二共和制[7]の歴史を理解する鍵をあたえた。ここではマルクスは、この歴史で自分の法則を試験したのであって、それから三三年たったいまでも、われわれは、マルクスはこの試験にかがやかしい成績

で合格した、といわなければならないのである。

フリードリヒ・エンゲルス

一八八五年ハンブルグ発行のマルクスの著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』第三版のためにエンゲルス執筆

第三版のテキストによる

ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日

一

ヘーゲルはどこかで、すべて世界史上の大事件と大人物はいわば二度生じるものだ、とのべている。彼は、一度は悲劇として、二度目は茶番として、とつけくわえるのをわすれたのである。ダントンのかわりにコーシディエール、ロベスピエールのかわりにルイ・ブラン、一七九三―一七九五年の山岳党[8]のかわりに一八四八―一八五一年の山岳党、伯父〔ナポレオン一世〕のかわりに甥〔ルイ・ボナパルト〕。そして、ブリュメール一八日の再版がだされるさいの事情にも、これとおなじ戯画が見られる！

人間は、自分で自分の歴史をつくる。だが、自分の思うままに、自分でえらんだ事情のもとでつくるのでなく、すぐありあわせの、あたえられた、過去からうけついだ事情のもとでつくるのである。すべての死んだ世代の伝統が、いきているものの頭脳を夢魔のようにおしつけている。そこで、人間は、まさに自分自身と事物とを変革し、まだこれまでになかったものをつ

くりだす仕事をやっていると思えるときに、ほかならぬそういう革命的危機の時代に、おずおずと過去の亡霊をよびだして自分に奉仕させ、その亡霊から名前と戦いの合言葉と衣装とを借りうけて、こういうゆいしょある扮装と借りもののせりふとで世界史のあたらしい場面を演じるのである。こうして、ルッターは使徒パウロに仮装し、一七八九—一八一四年の革命は、ローマ共和制とローマ帝制の衣装をかわるがわる身にまとい、一八四八年の革命にいたっては、あるときは一七八九年を、あるときは一七九三—一七九五年の革命的伝統をもじるのが関の山であった。これとおなじように、あたらしい外国語をおぼえた初心者は、たえずそれを自分の母国語に訳しもどすものであるが、母国語を思いおこさずにその言語をあやつれるようになり、それをつかうさいにはうまれつきの言語をわすれるようになったときに、はじめてそのあたらしい言語の精神をわがものにしたことになるのであり、その言語を自由につかいこなすことができるのである。

それらの世界史上の死者の呼びだしをしらべてみると、そのあいだに一つのきわだった違いがあることが、すぐ目にはいる。カミーユ・デムーランや、ダントンや、ロベスピエールや、サン－ジュストや、ナポレオン、これらの昔のフランス革命の英雄たちも、またその党派も、群衆も、ローマふうの衣装をつけ、ローマふうの言葉をつかって、自分の時代の任務、すなわち、近代ブルジョア社会を枷(かせ)からときはなしつくりだすという任務をなしとげた。はじめの四

人は封建的な地盤をうちくだき、そのうえにはえていた封建的な頭を刈りとった。あとの一人は、フランスの国内には、自由競争の発展や分割された土地所有の利用や国民のときはなされた工業生産力の使用をはじめて可能にする諸条件をつくりだし、またフランス国境のそとでは、ヨーロッパ大陸にフランスのブルジョア社会にふさわしい、時勢に合った環境をつくりだすのに必要なかぎりで、いたるところで封建的な諸制度をはきすてた。さて、あたらしい社会構成体がいったんつくりだされてしまうと、太古の巨人たちはきえうせ、それといっしょに、よみがえったローマ風――ブルトゥスたち、グラックスたち、ブブリコラたち、護民官たち、元老院議員たち、さてはカエサル自身までもきえうせた。しらふの現実におけるブルジョア社会は、そのほんとうの通訳や代弁者として、セー、クーザン、ロワイエーコラール、バンジャマン・コンスタン、ギゾーのような人々をうみだしていたし、そのほんとうの司令官たちは帳場のうしろにすわっており、福助頭のルイ一八世がその政治上のかしらであった。ブルジョア社会は、富をつくりだすことと、競争という平和な闘争とにまったく没頭して、ローマ時代の幽霊が自分の揺りかごをまもってくれたなどということはもう理解できなくなった。しかし、ブルジョア社会は非英雄的であるとはいえ、それをこの世にうみだすには英雄心が、犠牲や、テロルや、内乱や、諸国民間の戦いが必要であった。そして、ブルジョア社会の剣士たちは、ローマ共和国の古典的にきびしい伝統のなかに、理想と芸術形式を、つまり、ブルジョア的に制限された

自分の闘争の内容を自分自身にかくし、自分の情熱を大きな歴史的悲劇の高みにたもつために彼らの必要としていた自己欺瞞を、見いだしたのである。おなじように、一世紀まえにはこれとはちがう発展段階で、クロムウェルとイギリスの人民は、旧約聖書から彼らのブルジョア革命のための言葉や情熱や幻想を借りたのであった。ところが、じっさいの目標が達せられ、イギリス社会のブルジョア的改造がなしとげられてしまうと、ロックがハバクーク[9]をおしのけてしまった。

こうして、それらの革命で死者をよみがえらせたのは、ふるい闘争をもじることにではなく、あたらしい闘争を賛美することに役だった。あたえられた課題の解決を現実において回避することにではなく、その任務を想像のなかで誇張することに役だった。革命の幽霊をふたたびうろつきまわらせることにではなく、革命の精神をふたたび見いだすことに役だった。

一八四八―一八五一年には、老バイイーの扮装をした républicain en gants jaunes〔黄色の手袋をはめた共和主義者。「黄色の手袋をはめた」とは「しゃれ者」の意〕マラストから、自分のくだらぬ、いやな面相をナポレオンの鉄のデスマスクのしたにかくしている冒険家〔ルイ・ボナパルト〕にいたるまで、昔の革命の幽霊ばかりがうろつきまわった。革命によって自分の運動力をはやめたものと信じている一国民全体が、突然気がついてみると、死んだ時代にひきもどされ[10]ている。このあともどりに思いちがいがおこりえないようにと、昔の日付が、昔の年号、昔の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor